Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P－195　卵巣明細胞腺癌におけるエストロゲンおよびプロゲステロンレセプター発現の検討

富山医薬大
藤村正樹、片岡　健、日高隆雄、山川義寛、伏木　弘、泉　陸一

＜目的＞　卵巣明細胞腺癌は抗癌化学療法に抵抗性で、その生物学的特性についてもほとんど知られておらず、卵巣癌治療において現在最も問題となっている腫瘍である。本腫瘍が各種ステロイドレセプターを発現しているか否かについての報告はなく、本腫瘍に対するホルモン療法の可否や、根治手術後のホルモン補充療法が可能であるか否かについての知見は得られていない。今回我々は、本腫瘍に罹患した患者に対するホルモン療法や、根治手術後のQOL改善を目的としたホルモン補充療法が可能か否かについての知見を得るべく、摘出腫瘍組織におけるエストロゲンレセプター（ER）およびプロゲステロンレセプター（PR）発現の有無についての検討を行った。＜方法＞　当科にて初回治療を行った卵巣明細胞腺癌18例と、対照として卵巣類内膜腺癌12例の摘出腫瘍組織ついて、ERおよびPRの発現の有無を、抗原賦活処理後、免疫組織化学的に検討した。＜成績＞　卵巣類内膜腺癌ではER、PRとも高頻度で発現していた（ER:75%、PR:91.7%）が、明細胞腺癌ではERの発現は一例にも認められず（0%）、またPRは18例中2例の細胞質に弱く認められたのみであった（11%）。類内膜腺癌と明細胞腺癌におけるER、PRの発現頻度は何れも有意な差を認めた（p＜0.001）。＜結論＞　卵巣明細胞腺癌の生物学的特性として、エストロゲンおよびプロゲステロンに対する感受性を所有していない可能性が示唆された。本検討結果のみからは一概には言えないが、卵巣明細胞腺癌手術後のホルモン補充療法を行いうる可能性が示唆された。また、ホルモン療法の効く可能性は低いと考えられた。

P－196　III期卵巣明細胞腺癌の予後不良因子

筑波大学
角田　肇、佐藤有希、佐藤奈加子、田中奈美、田辺麻美子、西出　健、西田正人、久保武士

［目的］卵巣明細胞腺癌は、卵巣癌の中でも化学療法に抵抗性で予後不良とされている。しかし、意外とその事実を証明した成績は乏しい。そこで、本研究ではシスプラチンを用いた化学療法を施行したIII期明細胞腺癌と漿液性腺癌を比較し、明細胞癌の特徴を明らかにした。
［方法］1983年から当院で治療したIII期卵巣明細胞腺癌14例と、III期漿液性腺癌28例を臨床病理学的に比較検討した。
［成績］年齢に明細胞腺癌(48.1±11.6歳)と漿液性腺癌(55.0±13.6歳)に有意差はなかった(p=0.12)。明細胞腺癌の14例中6例(42.9%)に卵巣子宮内膜症が合併していたが、漿液性腺癌では認めなかった(p<0.001)。明細胞腺癌4例で血栓塞栓症（肺血栓塞栓症2例、脳梗塞2例）を発症したのに対し、漿液性腺癌では1例もなかった(p=0.009)。明細胞腺癌では術中1期と思われたが、リンパ節転移によって3c期になった症例を3例認めたが、漿液性腺癌は全例腹腔内病変によりIII期と診断されていた(p=0.03)。平均生存期間は明細胞腺癌が25.2ヶ月、漿液性腺癌が41.2ヶ月で明細胞腺癌で有意に短かった（p=0.019)。測定可能病変を持つ明細胞腺癌でシスプラチンによりCRを得られた症例はなく、長期生存している1例(85ヶ月)はリンパ節転移のみで3c期となった症例であった。
［結論］明細胞腺癌は漿液性腺癌に比較して外性子宮内膜症を発生母地としている可能性が高く、早期にリンパ節転移をおこし、プラチナベースの化学療法に抵抗性であり、更に血栓症をおこす。このような因子が相まって予後不良となっていると考えられた。

NII-Electronic Library Service